

『蛇恋艶華』

著：西野 花

ill：笠井あゆみ

「俺、どうしたの……？ 何があったの？」

「———あのな」

彼は決意したように口火を切る。

「お前は発情したんだ。あそこで。今は抑制剤を打ってもらっている」

「え？」

腕に目をやると、点滴に繋がれていた。

「鼓巳はまだバースがわかっていなかっただろう。さっき、わかったんだ」

嫌な予感がする。その先は聞きたくなかった。だが、清武の言葉は続く。

「お前はオメガだったんだよ、鼓巳」

「———」

正直を言うと、さほどの驚きはなかった。ああやはり、という思いに包まれる。

俺はオメガだった。母さんと同じだ。ずっとどこかで諦めや予感のような思いがあって、それを今目の前に突きつけられた。だが。

「———え。あの場に、アルファの人いたんじゃ……」

オメガのフェロモンはアルファの凶暴性や性欲を誘発する。もしも鼓巳がオメガだったのなら、あの時の自分は爆弾のようなものだったはずだ。

「今は自分のことだけを考えろ」

「どうなったの、清武！ ねえ、あそこにはいたはずだよね！」

清武は答えなかった。鼓巳の背に氷のように冷たいものが走る。さっきはあんなに身体が熱かったのに。

結論から言うと、鼓巳が発情した時、あの場所では血が流れた。フェロモンにあてられて鼓巳を襲おうとした者同士が争い、またベータで鼓巳を守ろうとした者も巻き込まれた。

「死人は出なかった。それは幸いだった」

「……俺、なんてことを……」

「お前のせいじゃない。お前があそこで発情するなんて、誰も思わなかった」

清武は鼓巳をかばってくれる。だが、そうではない。鼓巳はまだバースがわからず、オメガになる可能性はあったのだ。

「だとしたら、お前をあの部屋に配置した俺の責任だ」

「違う。俺が自分で気をつけるべきだった」

自分は取り返しのつかないことをしたのだ。鼓巳を信じてあの場を任せてくれた清武の信頼を

裏切り、組に忠実に尽くしてくれる構成員達を傷つけた。

「落とし前をつけないと」

過失を犯してしまったのなら、罰を受けなければならない。それはこの世界に生きる者のルールだった。

「お前は筋モンじゃない、そんなことを考えなくていい」

「そういうわけにはいかないよ。清武だってわかってるんだろう！」

鼓巳が思わず声を荒らげると、清武は黙り込んだ。彼は組長に一番近い場所にいる男だ。鼓巳をかばい立てすれば、彼にも責が及ぶかもしれない。

怖い。だが、逃げるわけにはいかないし、どうせ逃げられない。

「父さんのところに連れて行って」

「鼓巳」

「お願いだから——。せめて、自分から向かわせてよ」

身体の震えが止まらない。恐怖のためだ。清武に迷惑をかけたくないという一心だけで堪えている。

清武の、膝の上に置かれた拳が固く握りしめられる。男らしい眉間に深い皺が刻まれた。

「———わかった」

苦々しい声が彼から発せられる。こんなに苦しそうな声を聞いたのは初めてだった。

「動けるなら、行こう———。親父のところに」

鼓巳はもう長い間低頭し、畳に額を擦りつけていた。

「今回のこと、申し開きもございませぬ。何なりとご処分願います」

座敷の上座には一ノ葉会の頭である藤治が座していた。その横には清武がいる。妻である菊子は、怪我をした組員に付き添い、病院に行っているらしかった。平伏している鼓巳を前にして、彼はしばらく黙っている。

「———まあ、なあ」

そしてようやく、座敷にしゃがれた声が響いた。

「必ずしも、お前に過失があったわけでもねえ。何せ突然のことだったわけだからな。……だが、納会は中止、おまけに何人も病院送りになっちまった。この不始末、誰かが落とし前をつけなくちゃならねえ。それはお前にもわかるな？」

「はい」

「親父、鼓巳に責を負わせるのは、あんまりだ。こいつはまだこっち側の人間じゃねえ」

「だが、一ノ葉の人間であることは変わりねえだろうがよ」

清武の言葉を、藤治は黙らせた。彼はぐっと声を呑み込み、悔しそうに鼓巳を見ている。

「指の一本で許してやろうとも思ったが、それよりももっと、こいつに合った落とし前があることに気がついたのよ」

「……」

鼓巳は身体を硬くしてその沙汰を待つ。

「鼓巳。お前はこれから、うちが取引をする時に接待をやれ」

「……？」

藤治の言葉の意味がわからなくて、鼓巳は微かに顔を上げた。

「わかるか？ もてなすんだ。お前のその、オメガの身体でな」

「—————親父！」

「……！」

その意味がわかった時、清武は鋭い声を上げ、鼓巳は息を呑んだ。

「お前は母親に似てツラもいい。きっと身体も極上だろう。お前が病院にいる間に血液検査してもらったが、どうやらお前のフェロモンはアルファの奴にひどく効果があるらしい。特異体質って奴か。時々そういうのが生まれるらしいな。お前のために、うちの精鋭が殺し合いかけたくらいだからな」

鼓巳は唇を噛んだ。これが自分に与えられた罰か。

「—————承知いたしました」

両手を揃え直し、鼓巳は深々と頭を下げる。

「その落とし前、つけさせていただきます」

「……鼓巳……！」

「よく言った」

これでいい。おそらくこれで、清武に責が及ぶことはないだろう。オメガとしての身体などどうでもよかった。後は、こちら側の人間であるということを示すだけだ。

「—————ひとつ、お願いがあります」

「何だ」

「俺の身体に、刺青を入れてください」

鼓巳のこの発言には二人とも言葉を失ったようだった。

「そりゃあ構わねえが、一度入れたら簡単には消せねえぞ」

「わかっています。これは俺の、けじめのようなものなので」

藤治はふむ、と顎に手をかけて考えるような素振りを見せる。その時、清武が口を開いた。

「—————親父、それは俺にまかせちゃくれねえか」

「あん？」

「鼓巳の身体に入れる刺青の手配と、ウリをやらせるなら仕込みもしないとならねえだろう」

鼓巳は微かに瞠目した。

藤治はしばし自分の息子を見ていたが、やがて肩を竦めるように頷く。

「お前は昔っから鼓巳鼓巳と、こいつの面倒を見ていたからなあ」

清武は廊下で鼓巳を助けたあの日から、鼓巳の本当の兄のように振る舞っていた。勉強を見てくれ、体調を崩した時などは何かと気遣ってくれた。

「それは間違っちゃいねえが。鼓巳のことはちゃんと見ていてやらなくちゃならねえ。それに、オメガのフェロモンに耐性のある俺が適任だろう」

「……まあな」

清武はオメガフェロモンに耐性がある。アルファはオメガのフェロモンには逆らえないが、清武にはどういうわけか影響がなかった。彼もまた、特異体質というやつなのだろう。だから、彼は発情した鼓巳の側にいても平気なのだ。

(清武は、あんな失態をしでかした俺のことを見捨てないでいてくれている)

そう思うだけで、鼓巳は嬉しかった。これからどんな目に遭おうとも耐えられると思った。

今の自分がこんなことを思うのは許されないのかもしれない。けれど鼓巳は、この胸の昏い悦びを消すことはできなかったのだ。

「—————どうです、この仕上がり」

鼓巳はほとんど裸で、清武に背中を向けて立っていた。

「図案も彫る位置もちょっといつもと違っているが、何しろ地肌がすごくいい。腕が乗ったよ」

鼓巳の肌を彩る蛇と牡丹の刺青は、彫り師にとっても会心の出来だったらしい。

「ああ、いいな。まるで生きているような蛇と牡丹だ」

彫り師は合わせ鏡で鼓巳にも彫り物を見せてくれた。鏡越しに見えたそれに、鼓巳は思わず目を奪われる。

育った環境から、鼓巳は刺青を目にすることが多々あった。最近は刺青を入れない者も増えてきたと聞かすが、一ノ葉の男達は、藤治も清武も見事なものを背負っている。菊子も観音を彫っていると聞いた。

清武の刺青は鬼の彫り物で、初めて見たのは一緒に風呂に入った小学生の時だったが、その迫力に思わず泣きそうになってしまったものだ。

だが今は、彼の彫り物を美しいと思っている。あの、今にも人をとって喰らいそうな鬼の形相は、清武の強さを、彼の猛々しい魂をそのまま表しているようにも思えた。

「美しいな」

清武の口から、陶然としたようなつぶやきが漏れる。鼓巳は気恥ずかしさで思わず目を伏せた。だが、嬉しい。

「施術の痛みにも音を上げなかった。根性も座っているよ」

「……清武がいてくれたからです」

肌に針を刺す時には、常に清武が側にいてくれた。苦痛に顔を歪めると彼が手を握ってくれて、そのおかげで鼓巳は泣き言を漏らさないでいられた。

その苦痛は確かに大きかったが、鼓巳は耐えた。この世界に生きるのならば、多くの者が通る痛みだ。それに、自分への罰だと思えばなんということもなかった。

「次は仕込みだ」

清武の言葉に、鼓巳は頷いた。清武が個人で持つ山間の別荘は静かで、周りにはあまり家も商

業施設もない。冗談で『殺されるのかと思った』と言ったら軽く小突かれ、『しゃれにならないことを言うな』とめられた。

車に乗せられてここに連れてこられたが、彼はここで自分と過ごすつもりなのだろうか。だとしたら少し嬉しいなと思った。

「……本当にわかってんのか」

「わかってるよ。客を取るためでしょう」

そう答えると、清武は顔をめる。そんな彼の仕草に少し傷ついてしまった。

「俺なんかに触るのは嫌かもしれないけど」

「何言ってる」

和モダンの別荘はシンプルで、極道の家でありがちな華やかな感じがしない。こんな静かな場所では、いっそ近くの溪流で釣りでもして過ごすか、日がな一日本でも読んでいるのが似合いのような気がした。風呂は広くて清潔で、昼間に入ると天窓からの日差しが心地よい。

本当にこれから、清武に抱かれるのか。

こんなことを思ってしまう自分は覚悟が足りないように思えて、鼓巳はバスタブの中で膝を抱え込む。

馬鹿なことは考えないほうがいい。彼はただ、これから客を取らなければならない鼓巳のために、性の手管を教えてくれるだけだ。

鼓巳は気持ちを切り替えてバスタブから立ち上がり、浴室を出た。寝室に行くと、先に風呂をすませていた清武がバスローブに身を包み、煙草をくわえて窓の外を見ている。

「清武」

「おう」

彼は鼓巳を見ると、窓辺から離れキングサイズのベッドに腰掛け、手招きをした。彼と同じバスローブ姿の鼓巳は、素足で彼の元に歩いて行く。腕を引かれ、膝の上に抱え上げられた。

「あ……」

「いい匂いだ」

首筋に顔を埋められて囁かれる。心臓の音がどきどきして、きっと清武にも伝わってしまうだろう。いったいいつの頃から彼にこんな感情を抱くようになったのだろうか。思慕の念だけではなくこんな浅ましい肉欲まで。

鼓巳は最初の忌まわしい発情から、二回目の発情期を迎えていた。もちろん抑制剤は服用してはいるが、どうも鼓巳は抑制剤の効き目が悪い。こんなことから、危なくてアルファの前には出せないと藤治に言われた。

だから鼓巳は数日前から身体が熱っぽく、腰の奥の鈍い疼きに悩まされている。清武が鼓巳をここに連れ出したのは、そのための措置でもあった。

「お前の匂いを嗅ぐと凶暴になる、か。俺にはわからん」

「……それなのに、こんなことに付き合ってくれるの？」

興奮していないと言われたようで、少しがっかりしてしまう。だが彼は鼓巳の腰をぐっ、と自分のそれに密着させた。

「早とちりをするな」

「っ」

触れ合った熱さと硬さに息を呑む。そこはしっかりと勃ち上がり、脈打っていた。

「フェロモンなんか頼らなくとも、俺はお前に欲情している」

「清武……」

視界が半回転し、ベッドの上に組み敷かれる。バスローブの帯がしゅる、と解かれた。

「兄弟同然で育ておきながら、俺はお前とずっとこうしたいと思っていたんだ。……幻滅したか」

耳を疑うような言葉に身体が震えた。オメガの特性なのか、好いた男の子供を孕みたいと下腹が疼く。だが今の鼓巳にはそれは許されない。先日から避妊薬を服用していた。

(そんなこと思わない。俺もずっとこうされたいって思ってた)

胸の内の言葉は秘めておく。今伝えても彼を困らせるだけだと思った。清武が鼓巳に欲情を覚えているのなら、それだけでいい。

「……これからどうせ、嫌ってほど男と寝るんだ。それなら少しでも愉しめたほうがいいだろう。だったら、俺が教えてやりたい」

清武はそう言って、鼓巳の唇を奪った。初めての口づけ。熱く弾力のある舌が口の中に入ってきて、粘膜を舐め上げてくる。それはとても気持ちよかった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>